

電気の街から世界のテクノタウンへ 変貌を続ける秋葉原

今、大きく変貌しようとしている秋葉原。

この街は、どこに向かおうとしているのか。

秋葉原の過去・現在・未来を、「秋葉原テクノタウン構想」を

提唱して新しい街づくりに奔走する、妹尾堅一郎氏

(NPO法人産学連携推進機構理事長)に聞いた。

文●鳥飼新市 写真●河野利彦 写真提供●NPO法人産学連携推進機構

ロボットとフィギュアの街

世界最大の電気街として知られている秋葉原は、いわば日本の「理工系の故郷」です。ここに来れば、電気や電子関係のどんな部品でも手に入ります。そんな場所は世界中、どこにもないと思います。

第2次世界大戦直後の1945年、電気部品を売る露天商が秋葉原駅前に店を並べたのが、この街の始まりです。そこに戦地から帰ってきた技術者たちが、ラジオをつくるために必要な部品を求めてやってきたのです。モノのない戦後の混乱の中で、彼らはラジオから世界の情報を得ようと考えていたのです。

その数年後、戦後の混乱が収束していく中で露天商が整理され、秋葉原駅の高架下に専門店街がつけられました。それが秋葉原の原点「ラジオセンター」です。やがてラジオセンターの各店では、アマチュア無線の部品なども取り扱うようになっていきました。

この「ラジオ街」の時代が、秋葉原の第一期だといえます。

1950年代後半から60年代にかけて、日本が高度経済成長を遂げていくと、秋葉原には電化製品の問屋ができ、一般の消費者にも製品を売る大型店舗が軒を並べるようになりました。秋葉原は「電気街」の時代を迎えます。

そして70年代終わり頃から、パソコンに使う電子部品を置く店が増えていき、80年代に入って一気に「パソコンの街」へと変わっていきます。これが第三期です。

今、秋葉原は、将来に向けての第四期を迎えています。



「海外から来る人たちのために、親切な案内所と安くて快適な宿泊施設を充実させたいですね」と妹尾さん

す。それを私は「ロボットとフィギュアの街」ととらえています。ロボットはテクノロジーの象徴で、フィギュアはサブカルチャーの象徴です。すなわち、秋葉原の第四期とは、テクノロジーとサブカルチャーの街ということです。

街全体が巨大な百貨店

このように秋葉原は、常に変化を続けてきました。しかし、この街を貫く変わらないいくつかの特徴があります。それがこの街独特の面白さをつくっているのです。その第一は「積層性」です。この街には、いまだにラジオやオーディオに使う真空管も売られているし、電化製品の量販店もあるし、パソコン専門店も数知れないくらいにあります。時代によって街の主力は変わっても、それぞれがずっと生きているのです。

二つ目は「新旧融合」です。秋葉原を歩いていると突然、19世紀から続く老舗の海苔屋があったり、宮内庁御用達の箸の専門店があったりします。江戸の守り神「神田明神」の祭りでは、秋葉原の一角を多くの神輿が練り歩くのです。

こうした江戸情緒溢れる古いものが、最先端のITの街に溶け込んでいる。これも秋葉原の面白い側面です。

さらになによりも秋葉原を特徴づけているのが「徹底集積」です。とにかく徹底的にモノを集めている。一般の家電製品から小さな電子部品まで、さまざまなモノに溢れています。

いわば、街全体が大きな百貨店といってもいいかもしれ



秋葉原の中心を貫く中央通り。家電やパソコンなどを扱う大型店が並ぶ。このビル群の後ろには、まるで迷路のような「アキバ」が広がっている

れません。電気製品や部品に限らず、鉄道模型や天体望遠鏡、フィギュア、ミニカーなど、あらゆるものが売られています。しかもこの街には、量販店もあればプロ向けの専門店、中古屋、さらには部品のみを扱う店までが軒を並べているのです。こまめに探せば欲しいものが必ず見つかる。

その意味で、秋葉原は「ここにはないものはない」と言える街なのです。

世界の最先端がわかる街に

そんな街が、いまテクノロジーとサブカルチャーの街に変身しようとしているのです。

サブカルチャーは放っておいても進化するものだし、放っておくほうがいいと思います。しかし、テクノロジーに関してはそうはいきません。私は、秋葉原を世界的なテクノロジーの拠点にしていきたいと思っているのです。

その象徴が「ロボット」です。産業用ロボットではなく、二足歩行するパーソナル・ロボットです。日本は、産業用ロボットの分野では世界一の技術を誇っていますが、パーソナル・ロボットも世界一なのです。しかも、このロボットは秋葉原生まれです。

パーソナル・ロボットは、まだホビーの段階にすぎま

せん。しかし、かつてホビーだったパソコンが、いまはそれなしではあらゆるものが動かなくなっているように、やがてロボットなしでは私たちの生活ができなくなるようになるかもしれないのです。そうなる前に「ロボットは秋葉原」という認知を世界的に広げていこうと思っています。

数年前から秋葉原で、ロボット文化祭やロボット運動会を続けているのは、そのためです。また、最先端技術のプロモーションや教育も積極的に行っていきたくし、その機会や場も提供していきたいと考えています。

テクノロジーにしても、サブカルチャーにしても、「アキバに来れば世界の最先端がわかる」と言われる街にしていきたいのです。📍



2006年に始まった「アキバ・ロボット運動会」。サッカーや格闘技などのロボット競技の観戦や、実際にロボットを操縦したり、ロボットと触れ合うことができる。毎年、3日間で約2万人の人たちが集まる